

まえがき

髪や頭皮の悩みを持つ人が増えていた。

当時は抜け毛・薄毛・細毛・薬剤によるダメージなど人によってさまざまで、その悩みを解決したいというニーズが高まってきているのを肌で感じていた。

もう遠い遠い昔、美容師になりたての頃、誰にも負けない技術力・デザイン力を自分に備えようと、各方面から借金してかき集め、美容業界にデザイン革命を起こした勉強会に参加。最高峰の美容技術・ヘアデザイン力を習得するための近道へのヒントが詰まった、日本を代表するアカデミーだ。

何年も何年もかかった。

D・D・Aでディプロマ取得後、自分で言うのも恥ずかしい限りだが、美容師における主要技術ヘアカット・ヘアカラー・パーマの技術は、控えめに言っても相当なスキルになった。

お客様に合わせ、写真撮影するためのクリエイティブなヘアスタイルのデザインは、日々の積み重ねによる経験によって、確実に向上し満足のいく仕事ができるようになっていった。

だが、しかし……。

いつしか髪の毛を多く抱えるお客様が、多くいることを肌で感じるようになる。

年齢とともに髪にボリュームを失い、白髪・抜け毛や薄毛に悩み、悩み、悩んでいるお客様が多くなっていった。

今まで培った技術では、解決することができないのではないか。

そんな思考が僕を襲ったのを覚えている。

僕も美容師として責任と重圧を感じながら、目の前に起こっている出来事から目を背けず解決しようと、たくさんの育毛・発毛・豊毛・増毛・ヘアウィッグに関する情報を、大量に集め、技術や薬剤を勉強しようと日々、努力をした。しかし、思うような結果を出せずに、失望に明け暮れていたことを今でも覚えている。

そんなある日、生まれて五カ月の息子の世話に明け暮れていたスタッフ兼妻のために、たまには息子を少しの間ではあるが実家に預けて、リラックスをさせるために京都発祥の谷村正一氏が代表を務める「髪の病院」のセミナーを受講した。

単純に関西弁の笑える面白い話が聞けるだろうと、勝手に決めつけて。

実際にセミナーを受けてみて、予想通り面白い話が満載だったのだが、それ以上に僕にとっでは美容人生が変わってしまふような内容が詰めこまれていて胸がいっぱいになった。

その内容は、それまで美容師として生きてきた僕の考え、いや一般的な美容師としての常識とは真逆とっていいほど、かけ離れたセミナーであった。

いつの間にか僕は、心を無にしてそつと講師である髪の病院代表・谷村正一の話や、一言一句聞き逃すまいと耳を傾けていた。

美容業界と自分に矛盾を感じ髪の病院のセミナーに行った結果、「美容師とは何か?」「どんな存在なのか?」「どうあるべきなのか?」について改めて思考をフルに回転させるきつ

けになった。

そして、ヘアカラーやパーマ、シャンプーやトリートメントといった美容師が使用している薬剤は、実は僕が思っている以上に危険であり、安全と安心と健康を阻害しているのではないかと、と思うようになった。

ヘアカラー・パーマの繰り返し、ホルモンバランスの崩れや食生活・生活習慣・薬剤の服用・ストレスも髪に重大なトラブルを招く、とする情報が存在すること。

インターネットで検索すれば、腐るほど出てくる。

僕は情報をもとに、危険を伴うヘアカラー剤やパーマ剤に頼りきった髪のデザインを優先していることが、現在髪や頭皮のトラブルの元になっている可能性があるのではないかと考えた。

知ってはいたが、その情報を見て見ぬ振りしていたのも事実で、美容学校でも美容専門誌

でも教えてくれない、びつくり仰天の情報だ。

美容師とは、どんな髪であっても似合うようにデザインするのが当たり前の仕事であるのは間違いない。一般的にも、それが常識だろう。僕も、その常識的な美容師を務め、十数年間必死な思いで繊細なカットを学び、どんな色鮮やかなヘアカラー施術でもできるように常に努力し、コンプレックスを解消するためのパーマ技術を幾年も研究していた。今思えば、誰よりも考え、お金を学びに費やしてきたという自負がある。そんな自分に行き詰まり、新たなものを求めていたのも事実。

しかし、どんな髪にも限度があつて、髪という素材が悪ければ似合うようにデザインすることも困難になってしまう。料理人でいえば、最高の料理の腕前を持っていても、食材がよくなければ腕前は最大限に発揮されないようなもの。

最高の腕前と最高の食材が必要なのは、最高の仕事を求めるなら当然なのではないだろうか？

セミナー中に僕は、自分の行ってきた美容師という仕事を、人を美しくきれいにするという仕事に疑問を持ち、何度も何度もぐるぐる、ぐるぐると自問自答を繰り返した。

恋をしたときのようなワクワクとした感覚、号泣するほどかわいそうで悲しい映画を見たときの感覚、どちらとも言えないような胸が詰まるような感覚があつたのを覚えている。

その後、全国各地で開催される髪の病院の技術セミナーに参加して、毛髪知識・美しい髪のためのヘアケア法を基礎から学びなおし、いや新たに学んだというべきだろうか。

今までの自分が精魂込めて行ってきた技術・理論といった美容術は、人を幸せに導いていくはずだったが、デザインを優先するあまり、間違つた方向へ進んでしまっているのではないかと、人を美しくする仕事をしているのに、実は危険な仕事なのではないかと矛盾を感じていた。正解はどちらなのか？ もしくは、美容師とは別の新たな仕事ではないのだろうか？ 多くの人の、髪という素材の悩みを解決。解決することができないまでも、悩みを軽減することができれば、新たな美容の幕開けになるだろうと信じている。

ステイプ・ジョブズのように新しくイノベーションを起こすことは、凡人の僕には難しいだろう。

しかし、髪という素材の改善と、今まで培った最高の技術とを融合することができれば、新たなイノベーションを起こすことができるのではないかと企んでいる。

普段、夢・目標を持ったことのない僕だが、ひとつ夢・目標を持つようになった。

尾崎豊は十五歳の夜に超高層ビルの空の下、届かない夢を見ていたようだが、僕は三十五歳の夜に日本の美容業界を変える。いや、変えられずとも、従来の美容業と美容の新たな安心・安全・健康という思考を、世の中のスタンダードにしたい。

デザインを中心とした美容業と、安心・安全・健康をもとにした髪の素材を重視した美容業をダブルスタンダードとして、届かない夢ではなく、きつと叶うと信じ、より深く薬剤・毛髪の勉強をして世の中に発信し続けていかなければならない。

いつか誰かが立ち上がろうと他人事にしてしまうのではなく、自分がやらなければ誰がや

るのだ、と僕は考えた。従来の美容師としてできる限りのことはした。これからはそれを進化させ、自分の力を使い、広めていかなければならない。

そんな気持ちである。

幸いなことに、現在はスマートフォンなどを活用してインターネットやSNSでの情報発信が盛んに行われている。それは誰にでも容易である。

それらを使い、ひとつのムーブメントを起こしていけるのではないかと考え、ただ今実行中だ。

ファーストペンギン

美容のイノベーションを起こす。

そのイノベーションを起こすには、最初に誰かが発案して動き出す必要がある。これはど
の世界でも同じである。

僕が読んだ堀江貴文の『99パーセントの会社は知らない』を参考に、わかりやすく伝える

ために「ファーストペンギン」の話をういよう。

「ファーストペンギン」という言葉は、NHKの朝の連続テレビ小説「あさが来た」にも登場し、話題にもなった。ペンギンは空を飛ぶことができない。そんなペンギンは、子どもときは陸の上で親からエサをもらいながら育っていくのだが、いずれ親離れをしてエサを自分で獲らなければならなくなる。しかし、エサである魚を獲りに海に入れば、シャチなどの天敵もたくさんいるし、その他にも数多くの危険や困難があったりする。

そんなときに、群の先陣を切って飛び込む勇氣と行動力のあるペンギンが、ファーストペンギンだ。ファーストペンギンは、誰もいない餌場に一番に到達できるからエサにありつくことができる。逆に、安全を求めて出遅れたペンギンはエサにありつけるかどうかかわからない。

これは、美容の世界でも同じではないだろうか。「常識ではない。あいつはおかしい」と言われながらも、先陣を切って研究をして成果を出す人は、言わばファーストペンギンだ。

追隨するセカンドペンギンと違い、ファーストペンギンは突拍子もない行動をするので、一歩間違えば狂っていると思われがちである。結果、ファーストペンギンは痛い思いをする

ことも少なくない、むしろ多いだろう。いつてみれば「一か八か」のような感じである。最初に海に飛び込むのだから、エサにありつける可能性も高いが、もしかしたら、シャチなどの天敵に食べられてしまうかもしれない。だが、いったんファーストペンギンが飛び込むと、セカンドペンギン、サードペンギンと続いて飛び込むようになる。もちろん最初に飛び込むだファーストペンギンは男気があるのだが、イノベーションを起こすには、このセカンドペンギンとサードペンギンも大事である。

ムーブメントには「二人目」が重要

僕は、セカンドペンギンであることを自負している。

「TED」という、世界的講演会を主催している団体がある。

その講演では、科学や学術、エンターテイメントなど、さまざまな分野の人物がプレゼンテーションを行っている。

そのプレゼンテーションのひとつに、「イノベーションの起こし方」というものがある。

出典：TEDホームページ『社会運動はどうやって起こすか』https://www.ted.com/talks/derek_sivers_how_to_start_a_movement?language=ja

大きな公園があり、そこで変な踊りをしている人が最初にいる。

周りにいる誰もが「なんだ、この人？ 大丈夫か？」と遠くから眺めていた。そのうち、変な踊りを真似る人物が出現した。これで変な踊りをする人物は二人になったのだが、それを見た周囲の人は、「あれ？ 二人になった」と思いはじめる。

そうこうしているうちに、変な踊りを真似る人物が三人、四人と増えてきた。こうなると公園にいる人たちは「もしかしたら、これは何かのムーブメントなのではないのか？」と思いはじめる。そして、真似をして踊る人は徐々に増えて、最終的には公園全体で変な踊りはじまる。

ものすごく簡単に説明すると、このような内容。

このイノベーションの起こし方の重要なポイントと言われているのが、「二人目が大事」ということだ。もちろん最初に動いた人、ファーストペンギンであるイノベーターも大事では

あるが、二人目、三人目のアーリーアダプターのようなセカンドペンギン、サードペンギンとなる人たちがいたからこそ、ムーブメントは起きたという内容のプレゼンテーションだ。セカンドペンギンになることは、ファーストペンギンに追随することだ。ただ、ファーストペンギンに共感や賛同をしていても、二の足を踏む人が多い。

「答えや得られるものの確証がないと、リスクを冒して賛同することが難しい」
このようなことを思っている人もきつといる。

僕はファーストペンギンではない。

僕以外の優秀な方々が、すでにファーストペンギンとして新たなムーブメントを起こしている。
いる。

そして僕はセカンドペンギン、サードペンギンとしてムーブメントに参加していきたい。

僕はセカンドペンギン、サードペンギンとして、リスクを冒してでもファーストペンギン

である人に追隨していく。そためにこの著書を上梓している。

飛び込めば大きなものが得られるかもしれないと思って……。

もちろん、リスクは覚悟のうえだ。